

Rio

豊田市矢作川研究所 月報

- ◆矢作川(上村川)源流探訪記
- ◆矢作川を撮り続けた50年
—写真家・久米守さんを訪ねて—
- ◆矢作川上流の河畔林整備が進んでいます
- ◆退任のごあいさつ

豊田市矢作川研究所 〒471-0025 愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F
TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028 e-mail yahagi@yahagigawa.jp URL <http://yahagigawa.jp>

2
2015
No.193

矢作川(上村川)源流探訪記

内田臣一

矢作川の源流をどこにするかについては、2説があります(詳しくは、矢作川研究, No.1, 1997, p.7-44, 田中 蕃, 矢作川流域の自然(その概要), 該当部分p.8-9を参照)。一般に、ある川の源流を決めるとき、本流の源流が選ばれます。それが決まらないということは、矢作川の上流では、本流をどの川にするかについて2説があるということです。

1つ目の説は、長野県根羽村の茶臼山(標高1,415m)の山頂東側にある根羽川の源流(標高約1,280m)とする説です。ここには車道が通じ、矢作川源流を示す立派な碑が建てられているので、訪れたことがある人も多いでしょう。国土交通省 国土地理院の地図では根羽川を矢作川の本流としているので、根羽川(上流では小戸名川)に「矢作川」という地名が入っています。この川を地図で上流へたどっていくと、確かに碑の立っている場所が源流と読み取れます。

もう1つの説は、長野県平谷村の大川入山(標高1,908m)の山頂北西側にある上村川(上流では柳川)の源流とする説です。本流を決めるとき通常とられる方法では、流域の面積、流路の長さ、流量などを比べますが、

地図を見たら、面積、長さについては、上村川が根羽川より大きいのは明らかです。また、源流の山地が標高も高く、険しく、私にはこちらを矢作川の源流とするのが、感覚的にぴったりと感じます。

どちらが本流かの議論はさておいて、根羽川の源流は人目に触れることが多く、よく知られているのに対して、上村川の源流には車道も登山道も通っておらず、どんな場所なのか実際に行ってみたという報告は見当たりません。

私ども愛知工業大学の河川・環境研究室では、大学院生の川崎嵩之君が矢作川水系のカワゲラ類水生昆虫を研究テーマとしているので、かねてから上村川源流で水生生物の調査をしたいと考えてきました。しかし、そこへたどり着くためには、まず登山道を約4時間歩き、そこから登山道を外れて道なき道をヤブをかき分けて進まなければならない、と困難が予想されました。それでも何とか行ってみようと考え、日帰りで戻って来られるよう朝早く出発する計画とし、万一のためにツェルト(非常用の小さいテント)や非常食・ヘッドランプ・ろうそくも携行し、長野県飯田警察署に事前に登山届を提出して、2014年8月



大川入山から北北西へ上村川源流域(中央)を望む



ササに覆われた上村川源流



上村川源流の流れと川崎嵩之君

13日に調査に出かけました。メンバーはその大学院生の川崎君、やはり大学院生の岡田和也君、卒研生の大森優樹君、早瀬大貴君、三上佳祐君、それと私です。

当日は朝早く出発するため、学生は前の晩から大学の研究室に泊まりました。大学を車で未明3:10に出発、登山口の治部坂峠(矢作川水系と天竜川水系の分水嶺)に車をとめて、朝5:25に登り始めました。快晴ではありませんでしたが、晴れて快適な登りが続き、8:30には大川入山の山頂に着き、山頂からは北へあららぎ高原へと下る登山道に入りました。この付近の登山道からは、目指す上村川源流域が前方によく見えます(前ページ写真)。亜高山帯の針葉樹林におおむね覆われていますが、明るい緑色に見えるササヤブも多く、後でこれに苦しめられることとなります。登山道を進んで山頂の北0.9km、標高1,800mの小さな鞍部から西へ、いよいよササヤブに突入しました(9:20)。ササの高さは人より高く、密生していて、進むのに大変な労力が必要でしたが、すぐに水がチョロチョロと流れる沢に出ました。

ここからが想定外でした。私は沢に出ればヤブが薄く歩きやすいだろうと予想していました。しかし、この山域のササヤブはすさまじく、かなり水が流れている沢も覆い尽くして密生しているので、沢沿いに進んでもヤブとの闘いでした。この小さな沢を下りきって上村川(柳川)の本流(標高1,710m)に出たのが10:20で、わずか500mの距離を進むのに1時間もかかりました。ここからは、いよいよ柳川本流を上流へさかのぼって、源流へと向かいます。本流は流量も豊富で河原もあり、歩くのは快適でした。しかし、それも標高1,740m付近までで、沢が細くな



上村川源流で優占していたミネトワダカワゲラ幼虫(体長約2cm)

るにつれ、再び密生したササヤブをかき分けて進まなくてはならなくなりました。沢が二叉に分かれたときは流量の多い沢を選び、標高1,730m付近の二叉では右の沢を、1,740m付近の二叉では左を選んで上り、源流に着いたのは11:35でした。これまたわずか600mほどを進むのに1時間以上かかりました。上村川(柳川)の源流は、2.5万分の1地形図「浪合」で大川入山の北北西に示された1,902m標高点の南南東0.2km、標高1,810mの地点になります。

源流付近だけは針葉樹林に覆われてササもあまり密生しておらず、水生生物の調査には問題ありませんでした。優占種は予想どおりミネトワダカワゲラで、他にもモンカワゲラ属、オンダケトビケラ属などが採れ、そこそこ虫の多い川でした。

この付近で数地点の調査をする予定でしたが、ここまでで要した時間から考えて、暗くなるまでに治部坂峠へ帰り着けるかどうか危うく、調査を終えたらすぐ帰路につきました(12:45源流発)。帰りは柳川本流から登山道へ戻るのに別の沢(標高1,700mで右岸から合流)を選びましたが、登山道(標高1,760mの最低鞍部)に戻ったのは14:20で、やはり強烈なササヤブに悩まされました。大川入山を経て治部坂峠に18:10にたどり着いたときは、ほっとしました。

このように、体力も山登りの技術も必要とされるので、一般の方には上村川の源流を訪れることは、まったくお勧めできません。けものが多いせいか、マダニもいます。1人が脇の下を咬まれました。

(うちだ しげかず、愛知工業大学)

矢作川を撮り続けた50年 —写真家・久米守さんを訪ねて—

洲崎燈子

昨年9月に岡崎市在住の久米守さんとおっしゃる方から、「過去50年以上にわたって撮りためてきた矢作川流

域の写真をこの度整理したので、活用して頂けるところに寄贈したい」というご連絡を頂きました。その後数回のや

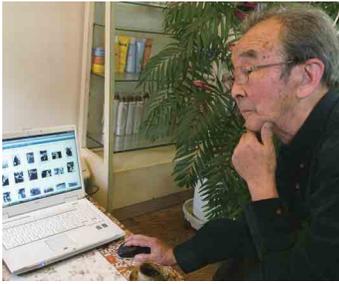


写真1：写真の解説をされる久米さん

りとりを経てお送り頂いた写真は約5,000点にも上り、資料的価値に加え写真作品としてのできばえも素晴らしいものでした。11月に長澤研究員とともに自宅にお出かけ、お礼かたがたお話をうかがってきました(写真1)。

久米さんは1933年愛媛県松山市のご出身ですが、電気工務のお仕事の関係で1959年に岡崎に移り住み、本業の傍らライフワークとして矢作川を撮られるようになりました。人のいる風景の写真を撮影されるのが好きで、リアリズム写真の大家、土門拳に心酔し、全日本写真連盟

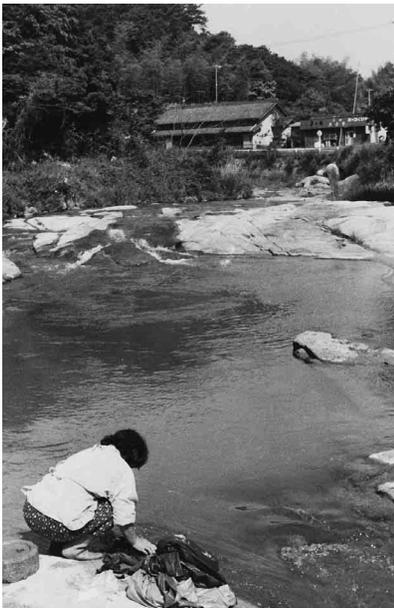


写真2：豊田市小渡町(昭和40年代撮影)

集団岡崎に所属して作品を批評しあい、腕を磨かれました。二科展の写真部展にも入選されています。矢作川の風景は故郷を流れる重信川に似て親しみやすく、特に豊田市域の矢作川は岡崎市域より未整備区間が多くて古い、いい川の風情があったとのことでした。

ご寄贈頂いた写真の一部をご紹介します。いずれも1960年代前後に

撮影された写真です。写真2は豊田市の小渡温泉付近の写真で、洗濯をしている女性が写っています。かつては衣類や障子紙の破れた障子などを川で洗う人の姿が普通に見られたそうです。写真3は豊田市の高橋付近の堤防で撮影されました。早春の風物詩だった野焼きの様子で



写真3：豊田市高橋町(昭和36年撮影)



写真4：岡崎市大門町(昭和36年撮影)

す。定期的に草を焼くことで土地を肥えさせ、新しい草を生えやすくしつつ、虫を取っていたそうです。写真4は岡崎市の、現在はバーベキューやキャンプができる公園として整備されている大門公園付近で撮られたものです。奥に矢作川の水面が見えますが、手前の河川敷とはほぼ同じ高さです。生物生息環境として重要な氾濫原は現在、矢作川ではほぼ見られなくなりましたが、撮影当時はまだ健在だったことが分かります。写真5は岡崎市、旧



写真5：岡崎市夏山町(昭和40年撮影)

額田町内の水車です。豊田市内の山間部にはかつて陶器の材料とするための石を挽く水車がたくさんありましたが、岡崎には米や蕎麦を挽く水車が多かったとのことでした。矢作川を見続けてこられた久米さんに川の変化についてお聞きしたところ、以前に比べ水はきれいになったが、人と川の関わりは減った、昔は人が川と共に生活していたとのことでした。

ご提供頂いた写真は今後、Rio等でご紹介するとともに、流域の環境変化をたどるための研究資料として活用したいと考えております。また、これらの写真が写された時代の記憶をお持ちの方がいらっしゃれば、お話をお聞きしたいと思います。貴重な写真を数多く提供して下さいました久米さんにあらためて深く感謝致しますとともに、頂いた写真にあらたな光を当てられるよう努力してまいります。

(すぎき とうこ、豊田市矢作川研究所 主任研究員)

矢作川上流の河畔林整備が進んでいます

内田良平

矢作川では約20年前から、地域住民の方々による水辺愛護活動（自主的な河畔林整備）が行われてきました。矢作川にはもともと護岸のために植えられた竹林が多いのですが、以前は竹を伐採して生活のために利用していたため、竹林が広がることはありませんでした。しかし、このような竹の利用がなくなってから、河辺にはジャングルのような竹林が広がってしまいました。多くの水辺愛護会が、このような河辺に密生した竹の間伐・皆伐を活動の中心にしています。これは人の視点からは、人が川に近づくことができる親水整備、また、川面が見えるようになるという景観整備であり、生物の視点からは、光が入ることによって生き物の多様な生息空間を創出していくものです。



写真1: 枯れた竹が折り重なった竹林（大河原町）

平成17年の市町村合併を受けて、矢作川研究所では上流の旧町村部の矢作川河畔林で生物調査をおこないました。その結果希少な鳥や昆虫（オシドリ、ヤマセミ、オオムラサキなど）がいることが分かり、こうした生き物と共存できる河畔林の適切な管理が望ましいという結論に達しました。そこでまずワークショップによって上流域の地域住民との意見交換をおこない、地域が目指す理想の河畔林を描き、豊田市と地域住民の役割分担を決めていきました。整備は主に地域住民による活動によって進められていくのですが、密生した竹林では人が入るのも困難な状況であるため（写真1）、豊田市が、作業用通路の確保や切った竹を置く場所づくりとして、竹の伐採と除根をしました。その後、地域住民による枯竹の除去や竹林の間伐整備、草刈など維持管理活動が始められました。

平成19年度からこの事業が始まり、現在上流域（旧町村）では6地区（上流から浅谷町、小渡町、有間町、築平



写真2: 愛護会活動が進められている河畔林（大河原町）

町、下川口町、大河原町）で地域による河畔林整備が活発に進められています。私は平成22年度から3地区において、最初の意見交換会から携わっているのですが、整備前の河畔林は、密生した竹と枯れた竹が折り重なっていて、暗くて薄気味が悪く、とても人が入れない、川に近づこうとは思わない状態でした（写真1）。しかし、地域の方による活動が進んでいくことにより、上流域でも川面の見渡せる見通しのいい竹林があちこちで見られるようになりました（写真2）。また、小渡町では切った竹を竹灯籠に加工して利用したり（Rio No. 160、2012年2月号参照）、有間町ではハチクのたけのこを「夢たけのこ」と名付けて商品化する取組も行われています。

整備が行われた竹林の風景は気持ちがいいですが、その風景を作るには大変な労力が必要です。特に上流には急勾配の斜面上の河畔林が多く、伐採はとてもきつい作業になります。私もこの事業に関わるまでは、水辺愛護活動で整備された竹のある河辺の風景をごく当たり前のものとして眺めていましたが、その裏にたくさんの方々の努力があることを知って、感謝と尊敬の気持ちを持つようになりました。これからも皆さんの活動を応援していければと思っています。

（うちだ りょうへい、豊田市矢作川研究所 事務局長）

▶ 退任のごあいさつ

長澤壮平（研究員）

1月をもちまして、本研究所を退任することとなりました。

約2年の短い間でしたが、豊田市に属する研究所という稀有な職場環境のなかで、お役所特有の規律や、あまり目立たない行政マンの思いや創造性など、他ではできないような貴重な経験をさせていただいたように思います。そしてなにより、源流域調査、環境運動調査など、矢作川流域についての学びを深めさせていただきました。

これまでお世話になった多くの方々に深く御礼申し上げますとともに、環境改善を実現するプロ集団として、矢作川研究所がますます発展されることを心より祈念いたします。



後記

今回は矢作川の源流について執筆頂き、矢作川に深く関わる活動をお伝えしました。矢作川の応援団が一人でも増えるよう、これからもRioの紙面を通して、矢作川の魅力をたくさんご紹介していきたいと思っています。（白）